

秘宝たちの面影を求めて

—カール博物館探訪—

土谷 遥子

十年以上滞在したアフガニスタンのカールで、カール博物館の存在は私のなかで大きな位置を占めていた。古来から、交易路が東西南北に交差していたこの地で展開された文明の交渉の証しが、比類のない秘宝としてカール博物館に収められていた。カール博物館は、「歴史や文化を学ぶ者にとっては“目も眩むような魅惑の殿堂”^{*}」として知られていた。

この世界的遺産が収められていた博物館が、1993年5月12日に、内戦による爆撃で破壊された。その展示品の多くは爆撃で失われ、辛うじて難を逃れた収蔵品もその後、略奪され、流失してしまった。二十世紀の終りにこのよ

うな蛮行が起こるとは信じがたかった。しかし悪夢のような知らせは現実であった。博物館の被災から10年もたった。現実をうけとめても、いまだにあの秘宝の数々が並べられていた展示室が目に見えてくる。

在りし日のカール博物館再訪を想起しながら、ダルルアマン通りをカール博物館へ向かって迎ってみよう。今はもうその運命すらもれない秘宝の面影を求めて、仮想のカール博物館を訪れてみよう。

カール博物館は、ダルルアマン宮殿に至る直線で10キロ続く並木道の先にあった。カールを南北に分けるコー・イ・アスマイ山の南の基点となる、デー・マザングのロータ

リーから、真直ぐ南にのびる並木道。紺青の空に映えて青々と繁った10メートル以上もある楓風の太木の間を、舗装された道路が伸びている。車を走らせると、右手にカルテ・チョール、そしてカルテ・セイの閑静な屋敷町が続く。やがて左手に真っ白なソ連大使館が見えてくると、右手にはアメリカン・スクール(AISK)国立Noor Eye Institute(眼科病院)そして日本の政府の無償資金協力(日建設計/鴻池組)で設立した国立結核研究所が次々と過ぎて行く。その先で並木道が途切れ、ダルルアマン宮殿手前で右折すると、カール博物館はその右手にあった。

^{*}梅棹忠夫、『シルクロードの十字路で』モタメデイ遥子、1976、前文、4頁

カール博物館の歴史

カール博物館は1918年に王族の宝物・文書、細密画、武器、美術品 - を母体として発足した。当初バーゲバラ宮殿に収められた収蔵品は、一時国王の宮殿『アルク』に移されていたが、ここに大きな変革の波が押し寄せてきた。1922年に開始されたフランス考古派遣団の発掘事業が次々と成果を納めたために、出土品が博物館に続々と持ち込まれてきた。殖え続けてゆく収蔵品を収めるために、1931年にダルルアマンにあった旧市役所の建物に博物館は移された。

新たに収蔵品が収められた建物は、1920年代にアマヌッラ王によってダルルアマン宮殿とともに市役所として建設された。変哲もない二階建てで、事務室を中心とした間取りは、博物館の展示に適しているとはいえなかった。しかし、1960年初頭から始まったさまざまな専門家の助言や指導によって、工夫の凝らされた展示が整えられていった。古代この地に於いて展開した東西文明の壮大な交流を展示室で偲ぶことができるようになった。展示されていた作品は収蔵品の7%に過ぎなかったが、すべて比類のない秘宝ばかりであった。1953

年以降、フランスの他に伊、米、日、独、英、露、印度、アフガニスタンの調査隊による発掘が加わった。発掘された文物はアフガニスタンの歴史を反映して、先史、マウリア、グレコ・バクトリア、クシャー、クシャー・ササーン、ヒンドウシャヒー、ガズナ各朝を網羅する膨大なものとなった。その為、カール博物館は、国内で蒐集された民俗学的資料が一副、一方アフガニスタンの国内で出土した考古資料または美術品が九割を占めるといふ、独特な特長を持つようになった。

玄関ホールから

玄関ホールに入ると、湿気を帯びた冷え冷えとした空気に包まれる。夏にはほっとさせられる涼しさで迎えられ、ホールのほの暗さに慣れると、博物館の代表的な展示物が目に入ってくる。数段の階段を登ると、左側には、青銅時代のタペ・フロル(ヒスト・テベ)出土の金と銀の盃があった。農民によって偶然発見され、仲間で分配する為、鉄で切られた跡も痛々しい盃は、かろうじて完全に切断される前に、政府によって保護された経緯を物語っていた。古代のインド、中央アジア、イラン、メソポタ

ミアのモチーフで飾られた数々の盃は、総重量、金940グラム、銀1922グラムもあった。近くにラピスラズリの鉱脈があることから、紀元前2500年ごろ、ラピスラズリ交易の物々交換のために西アジアからもたらされたものと考えられていた。特に、ほっそりした無飾の金盃は、メソポタミアのウル出土の金杯に類似し、美しい金色を放って注目されていた。

ホールの左側に展示されていた碑文の中で、グレコ・バクトリア朝、マウリア朝



写真1
ヘルマ/ヘルマイ(柱像)、大理石、高77cm、2C BC、アイハヌム。ヘルマ(本来、境界石、境界標)が守護神の胸像を戴く四角柱となったもの。本像は、競技の守護神で、学芸司のヘルメスの像と考えられる。

とクシャーン朝の三つの時代を代表するものを取り上げてみよう。

グレコ・バクトリア朝の碑文は、バクトリアのアイハヌムからフランス隊によって発見された。アレキサンドロス遠征はヘレニズムの遺産をバクトリアの地に残したが、アイハヌムは、長い間幻の都市として、バクトリアで探し求められていたギリシャ都市であった。ギリシャ語で書かれた碑文には、『子供は行儀を学び、若者は情熱を押しさえることを学び、中年には正義を保ち、老年には良い助言者となり、後悔する事なく死ぬように』と、ギリシャのデルフォイ神託の160節目が残っていた。アリストテレスの弟子クレアコスがデルフォイから写し取ってきたことも知られている。アイハヌムはアフガニスタンとタジキスタンの国境を流れるダリア・イ・パインジ（アムダリア/オクサス川）川と、バダクシャンに発するコクチャ川の合流点に建設された広大なギリシャ人都市。1965年からフランス隊によって神殿、宮殿、行政地区、ギムナシオン、劇場、浴場等が発掘され、丘の上には、未発掘ながらアクロポリスの存在も示唆されていた。

その丘に立って、アイハヌムの遺跡を俯瞰した時の、新鮮な驚きを忘れることはできない。爽やかな秋風、川岸にそびえる対岸の無人の山、オクサスとギリシャ人と呼ばれ、果てしない郷愁を招く川面。その岸辺にヘレニズムは開花したのだった。

アイハヌム出土の碑文以外の二点は二階のベグラム室に展示されていた。バクトリアの神官とも、また競技の守護神、学芸も司るヘルメス像とも考えられる堂々としたヘルメ柱像。（写真1）又、小アジア起原の豊穡多産の大母神キュベレーが黄金の戦車で行進する図にはギリシャ、西アジア、オリエント文化の交流が見られ、アイハヌムの多様な文化的背景を示していた。

アイハヌムが発見されるまでは、グレコ・バクトリア王国は、1949年ニアムダリア河畔で出土した壺から一括して発見され、『クンドウズの遺宝』と呼ばれた、精緻を極めた627枚の銀貨によって、その存在が知られていた。二階の『コイン室』には、ギリシャ世界で最大の、84グラムのアミュンタス王の五枚の硬貨を代表とする『クンドウズの遺宝』が展示されていた。

次は、紀元前三世紀に強大な帝国を確立

し、仏教をひろめたマウリア朝アショカ王の法勅碑文。カンダハルの郊外チェルズイナで発見されたこの碑文は、岩石に刻まれているため現地に残っていて、その石膏のコピーが展示されていた。1958年、ある小学生が担任の先生に、自宅の庭の大きな石に、文字が書かれていることを報告した。早速その石を見に行ったら先生は、石に刻まれた文字の中に数学で使う「や」があることに気がついた。この碑文はギリシャ語と、アケメナス朝の公用語であるアラム語で書かれたアショカ王の法勅で、殺傷を禁じ、父母、長老に従順であるべき事が説かれていた。アショカ王の世界が、まだアラム語やギリシャ語が使われていたカンダハルまで伸長していたことが立証された重要な碑文であった。

玄関ホール左手の壁には、一大遊牧帝国を確立して、仏教、仏教美術の発展に貢献したクシャーン朝の碑文があった。バクトリアのスルフコタルの神殿から発見されたもので、バクトリア語をギリシャ文字で記した25行の碑文から、カニシカ王の名や、また水が枯れた神殿が繁栄を呼び戻すために、修理され、新たな井戸が掘られたことが判読されている。スルフコタルの丘の麓から、碑文にあった井戸も実際に発掘され、碑文の信憑性も確かめられた。

丘の上の神殿付近から出土した、クシャーン朝の王族を表わした石像（写真2）は、玄関ホールの低い階段の左手に展示されていた。カニシカ王像ともいわれ、遊牧民の正装に身を包んだ、広く膀を開いた独特

の立ち姿は、写実性に富み、印度、マトゥーラ出土のカニシカ像の抽象的表現と対象的だ。1993年の破壊を免れたこの像は、人間の形をしているとの理由で、2001年タリバンによって叩き壊されてしまった。

二階 ベグラム・シヨトラック・ハッダ

クシャーンは、本拠地のバクトリアから南西にその勢力を伸ばし、中印度のマトゥーラまでの中間にあたる、ヒンドウークシュ南麓のカピシーと、ガンダーラのベシャルに拠点設けた。二階のベグラム室には、カピシーのベグラム遺跡から出土した東西の秘宝が展示されていた。西暦一世紀、二世紀のころにクシャーンがローマと中国を結んでいた交易路の、中心的拠点であったことを物語る文物であった。印度の象牙彫りの豊満で優美なヤクシー像。グレコ・ローマングラスの、ガレー船と男が漕ぐ商船を表わす透かし彫り杯や、花輪作りをする少女を流麗な筆致で鮮やかに描いたエナメル絵付杯（写真3）はエジプトのアレキサンドリアの工房で製作された。青銅小像はヘラクレスがエジプト・アレキサンドリアの冥界の神セラピスと習合した唯一の作例である。中国の漢代の漆器も存在していた事が、鮮やかに残った漆によって明らかになった。

クシャーン統治下のガンダーラで仏像が誕生した説は広く知られているが、カピシ地方に、焰を肩から吹き出させる焰肩佛の



写真2
クシャーン王立像、高133cm、石灰岩、2C AD、スルフコタル。バクトリアの神殿に、部族信仰の祖先像として祭られていたものであろう。堂々とした像はカニシカ王の像といわれている。



写真3
エナメル絵付杯（花輪作りをする四人の若者）ガラス製、13.5cm、1 - 2C AD、ベグラム。花輪作りをする少女の前に、若者が集めきた花を、籠を下にして空けている姿が、鮮やかな色彩と、流麗な筆致で描かれている。

独特な図像が生まれた。ペルシャの拝火教と関連があると見られる焰のモチーフである。クシャーンの貨幣の王像に見られる聖なる王権を象徴する焰肩を、新たに受容した仏教の仏像に付加させて、その権威を高めさせたのではないだろうか。カピシ地方のショトラック佛寺院出土の燃燈佛本生譚(写真4)からは、不動で、稚拙とも見えるクシャーン固有の美意識が感じられ、カピシ様式の代表的作例と言えよう。

ガンダーラに近いジャララバードのハッダ遺跡からは、柔らかさの中に深い精神性を伝えるストウッコ像が出土した。ガンダーラの古典的範疇に依る、様式を越えた奥深さを感じさせる。(写真5)

二階 パーミヤーン・フォンドキスタン

パーミヤーン大仏像のあった摩崖から、東南約4キロに位置するカクラク寺院にも、6.5メートルの仏像がある。その南の

八角形の社堂のドーム天井の壁画は、中央の弥勒菩薩像を囲む円鼓部に、八個の圓輪構図があり、それぞれ千仏構成が鮮やかな原色、特に赤褐色で描かれている。パーミヤーンで開花した、華麗な天蓋壁画の諸様式である印度様式(55m大仏)、ササーン様式(38m大仏)、中央アジア様式(E堂:38m仏の西側にある石窟)等に並び、カクラク独自の様式として捉えられよう。

パーミヤーンからカピシの中間にあったフォンドキスタンの慎ましい寺院では、アフガニスタンの仏教美術の最終期を飾った、爛熟した様式がひそやかに育てられていた。しなやかな身のこなして、指先に青い蓮の花を持つ菩薩の姿(写真6)は、印度のアジャンタ第一窟の蓮華手菩薩像を彷彿させる。ふくよかな、やや傾いた顔は瞑想的である。しかし、青の背景、赤の光背に白く浮かびあがる肢体には陰影が見当たらない。翻る冠帯にもイランの文化の影響がうかがえる。印度、イランの様式が習合して、中央アジアの様式となり、最後には

法隆寺にまで到達した壁画の流れの中の、一つの道標とも云うべき作品である。

終わりに

古代の文明の交流を自らの存在で示したカーブル博物館の秘宝たちは、本当に失われてしまったのだろうか。それとも、人知れずひっそりと何処かで出番を待っているのであろうか。二十世紀の大半を費やして発掘された品々であった。出てきて欲しい。祈るばかりである。

つちや はるこ
モロッコ・カサブランカ生まれ。鎌倉で育つ。国際基督教大学教養学部卒業。日本ユネスコ国内委員会事務局勤務、ミシガン大学大学院(東洋美術史)修士課程終了後、カナダ・トロント市ロイヤル・オンタリオ博物館准学芸員を経てアフガニスタン・カーブル大学文学部講師、カーブル博物館客員研究員。上智大学比較文化学部教授(1989-99)、ウィスコンシン大学(1989)及びカリフォルニア大学客員教授(1998)。現カリフォルニア大学バークレー校客員研究員。著書「シルクロードの十字路で」(実業の日本社)、「シルクロード博物館」(共著)(講談社)、『古代バクトリアの息遣い』『文明の道 ヘレニズムと仏教』(共著)(NHK出版)等、その他論文多数。



写真4 燃燈佛本生 浮き彫り、片岩、3 - 4C AD、ショトラック。クシャーンの一拠点、カピシ地方の仏寺ショトラック出土の焰肩の燃燈仏。クシャーン人固有の美意識と、聖なる王権の象徴が仏教図像に習合されたもの。

写真はすべて『アフガニスタンの秘宝たち』(石風社、2003)より。編著:土本典昭、撮影:高岩仁(写真2,3,5,6)、外山透(写真1,4) 解説:土谷遥子 1988年11月に撮影されたこれらの写真は、カーブル博物館が1993年に破壊される以前に行われた最後の専門家による映像であると考えられる。

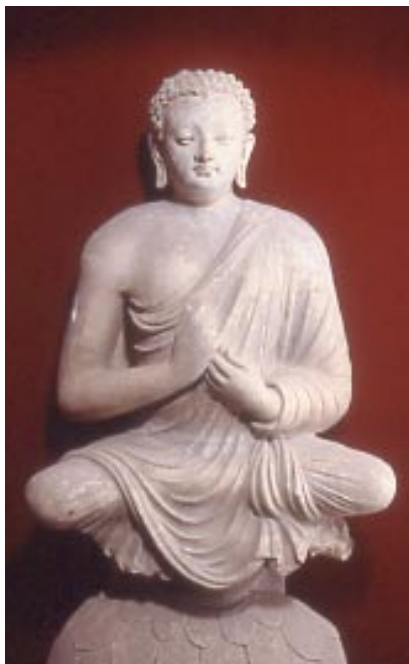


写真5 仏坐像(部分)(印相:転法輪印)、ストウッコ、3 - 4C AD、ハッダ。偏たん右肩で、蓮華座に坐し、説法印を結ぶ。衣紋の端麗な流れが優美にこの仏陀像を飾る。



写真6 菩薩像、壁画、高63cm、7 - 8C AD、フォンドキスタン。指先に青い睡蓮の花を持つ姿は、アジャンタ石窟第一窟の蓮華手菩薩像を想起させる。インドと、中央アジア、日本に至る絵画の流れの中の一つの道標ともいふべき作品である。